

稲永幸男先生をお送りする

服部 銈二郎

稲永幸男先生と初めてお会してから、もう四十年近くにもなる。つい昨日のように思われるほど、先生とのお付合の歴史は、私にとって、刺激的で、ドラマチックでさえあった。万感胸に迫るような多くの思い出が、目を閉じると尽きることなく、沸きあがってくる。稲永先生は、わが人生にとって忘れ得ぬ学問の上の、人間としての大先輩である。

先生との最初の出合いは昭和二十四年の頃だったと思う。丁度私が戦場から帰還、立正大学地理学科学生として、地理学研究に若き情熱を燃えたぎらせていた時代である。当時、恩師田中啓爾先生のご指導で、意欲的有志たちが集まり「川崎」と「江東三区」の共同研究を進めていた。稲永幸男先生はその「若者七人集」の中心的メンバーとして指導的役割を果たされたのである。私もその地誌研究の七人集に参加させていただいた。共同研究は四年間に及び、その間巡検、資料収集、調査・ヒアリング、研究会、集団討議と、厳しい、ハードスケジュールで、調査・研究が行われた。共同研究の成果は、日本地理学会大会で二回に亘って共同研究発表がなされ、大いに学会へ話題を投げかけた。共同研究の全貌は、稲永先生を編集主任として、『地理的総合研究』という著書にまとめ、田中啓爾先生編著の

かたちで、地理書出版の老舗、古今書院から刊行された。時に昭和三十三年早春のことである。この四年間、私は共同研究のリーダーとして、著書のまとめ役として、稲永先生の真摯で、研究心の旺盛さ、徹底した研究態度に触れ、しばしば感激させられたものである。私の稲永先生に対する感懐は、四十年経た今日でも、七人集の頃と少しも変わらない。先生の自分に厳しく、研究、教育に厳しい真の研究者としての横顔はどこから培かれたのだろうか、後輩としてお別れする淋しさを、噛みしめながら考えてみたい。綴ってみたい。

中途半端のできない、研究追究の徹底した厳しい人間性をもつ先生の性格を裏返えすと、悩める学生には、どこまでも相談にのり、郷里まで出掛けていって解決してやろうとする、愛情細やかな「人間教師」の一面が秘められている。この徹底した信仰心にも近い先生の考え方と行動は、研究上、教育上の信念となって現われる。そのため、ある場合には学生から反発をかうこともあるが、意志の強固な求める学生からは、慈父のごと慕われ、永遠の師として敬愛されることも事実である。

先生は、大正六年九月十九日、福岡県甘木市に生れ、小学生の頃から地図に興味をひかれていたようである。田中啓爾先生の母校でもある郷里の師範学校に入学し、そこで偉大な地理学者上野福男先生の指導を受け、本格的に地理学探究の道を歩くことになる。その後、地理学の魅力に憑かれ上京、立正大学専門部歴史地理科の門をたたき。公私の別なく地理学、人間論の指導を榊田一二先生から受け、戦争が激しくなった昭和十九年に卒業される。

田中啓爾先生のすすめで大阪府池田師範学校へ赴任し、戦後の混乱期を若者たちと学問や人生について大いに語りあかしたという。昭和二十二年、通信地理学の指導のため、請われて東京普通通信講習所教官として再度上京、先生の研究は「通信地理学」という、まったく未開の新しい分野に足をふみ入れることになる。研究と教育の中で体系化された「通信地理」「郵便地理」「電話地理」の三部作と、「電話地図帖」「郵便地図帖」の資料図帖は、部内でも

名著とされた。先生の創意になる応用地理学のこれら成果は、内外の話題となり、研究指導者としての先生の地位を著しく高めた。そのこともあってか、先生は、その後日本電信電話公社経営調査室（現在のNTT本社）へ栄転される。仕事は企画・経営分析・地域開発・電話需要予測などで、その担当リーダー、地域理論専門家として辣腕を奮う。当時の先生は、地理学の理論を根幹に、公社における仕事上の情報交流や、その地域的対応を通して、経営問題処理への地理学の応用化を積極的に推進しておられたようである。また、昭和三十年代に、すでに地域問題分析にコンピュータを率先して利用し、地理学研究へのコンピュータ導入に先鞭をつけたことも特記されよう。

さて、先生の長い人生は、苦難と歓喜にみちた地理学探求の旅のようなものである。飽くなき地理学求道への歩みは、新設の立正大学文学部地理学科への挑戦、東京教育大学理学部へ青野寿郎先生主査で博士論文「北海道における通話圏の地域構造」を提出、理学博士の学位を授与されたこと、日本地理学会で数多くの研究発表をされたことなどに現われている。稲永先生の学風というか、地理学の特徴は、大きく分けて三つぐらいの基盤に支えられているようである。

第一の柱は、今日立正大学の学部講義でも実践されている「情報地理学」という、新しい研究分野の体系化に力が注がれたことである。この成果は多くの論文に集約されているが、とくに「情報地理学についての研究」に明快である。

第二の柱は、計量的手法を積極的に導入、地理学の原像である「地誌」的研究をなんとかまとめあげようとして努力されている点である。その一つの現われは、先生が中心で昭和三十五年に行なわれた「東京周辺の地域構造」に関する調査研究である。総合化を狙ったこの研究は、わが国地理学会では最初の本格的計量分析（因子分析法）として学会からも高く評価され、マスコミに大きくとりあげられた。その二つ目は、計量化を使用した地誌研究が先生の

「研究手法」の中核をなしているように思われる。先生は昭和四十四年、母校立正大学のスタッフとして迎えられ着任されるや、田中啓爾先生、青野寿郎先生が担当されていた「地理学研究法」の講義を継承され、稲永先生独自の研究法を創意されるのである。その成果は「地理学研究法についての私見Ⅰ」「地理学研究法についての私見Ⅱ」「地理学研究法についての私見Ⅲ」などの論文に凝集されている。

第三の強烈な柱は、地域における社会経済現象の解明にあたって地理学の徹底的な応用化を試みたことである。学生時代、電々公社時代、大学研究者の現在、先生の考え方の根底には応用地理学確立への並々ならない信念と野望が流れていたようである。教育界のみの地理学では、将来の発展性が望み薄と考えられ、若い頃からエネルギーに地理の応用化に精進されてきた。電々公社での経営調査や需要予測の研究はもちろんのこと、運輸省委託研究「交通と都市化の関係に関する研究調査」、通産省委託研究「産業の地方分散における情報機能の在り方」、東京都首都整備局委託研究「情報地域学からみた都市問題」などは先生が手掛けられた地理学の応用化作戦の一端といえよう。

私は後輩として、四十年に及ぶ友人として、稲永幸男先生の学風やお人柄を、独断と偏見で述べさせていただいたが、最後に十八年間の大学生活を去られる先生に、お礼やら、お願いやらを、させていただき、饒といたしたいのである。

先生は自己の研究や生活に、驚くほど内面的で、実に厳しい。そのため隣人から誤解を受けることがあるが、徹底した学問追究の厳しい姿勢には頭が下がる。私は日々の研究生生活において、先生のこの一途な研究態度を常に刺激材料とし、見習い、手本とさせていただいてきた。この点、お別れに際し厚く御礼申し上げるものである。

第二点は、先生が野外実習で、ご自分の地誌研究で、十八年間追い続けた「飛驒高山」の地域研究について、その集大成をお願いすることである。先生は在職十八年間、研究と指導のフィールドとして「飛驒高山」の追究に、研究生

命を賭けてこられたのである。常人にはなかなかできない素晴らしいことである。どうぞ、地誌学の観点から、『飛驒学』の確立をなしとげていただきたい。

第三点は、生活態度が真剣で、内面的な先生は、社会の矛盾に対しても敏感で、真正面からぶつかることがある。ご自身が里親となり、里親会々長を長く務められてきたのも、先生の社会を見詰める暖かい愛の心の現われだと思う。社会の一員としてそのご苦勞を謝するものである。

稲永幸男先生、この三月でお別れしなければならぬ。十八年間に及ぶ大学でのご指導、ご鞭撻を、また四十年間の地理学を通してのご友情に対し、心から感謝するものである。お元気でこれからも、飛驒学の確立など、地理学の大道を、徹しながら、楽しみながら濶歩していただきたい。

主要著書（一部執筆を含む）

刊行年	書名	発行所
一九四九年	電話地図帖	電気通信省業務局
一九五〇年	郵便地理	郵政省郵務局
一九五〇年	郵便地図帖	郵政省郵務局
一九五一年	電話地理	電気通信省業務局
一九五六年	通信地理	日本電信電話公社電気通信共済会
一九五八年	大都市に隣接する周辺地域における大都市との通信交流について 田中啓爾編著地理的総合研究	古今書院
一九五八年	開通加入電話の生長とその構成 田中啓爾編著地理的総合研究	古今書院

一九六四年 日本の都市化(稲永・服部共著) 木内信蔵・山鹿誠次・清水馨八郎・
稲永幸男共著 古今書院

一九六六年 効果と予測 清水馨八郎・谷岡武雄・西村嘉助編著・応用地理学とその課題 大明堂

一九六七年 通信 幸田清喜編 経済地理学Ⅱ(朝倉地理学講座11) 朝倉書店

一九六七年 東京の通信上の地位 青野寿郎編 日本地誌―東京都― 二宮書店

一九六七年 通信の特性と現状 青野寿郎編 日本地誌―神奈川県・埼玉県― 二宮書店

一九六八年 通信の特性と現状 青野寿郎編 日本地誌―群馬県・埼玉県― 二宮書店

一九六九年 通信の特性と現状 青野寿郎編 日本地誌―香川県・愛媛県・徳島県・高知県― 二宮書店

一九六九年 通信の特性と現状 青野寿郎編 日本地誌―愛知県・岐阜県― 二宮書店

一九七〇年 通信の特性と現状 青野寿郎編 日本地誌―富山県・石川県・福井県― 二宮書店

一九七一年 通信の特性と現状 青野寿郎編 日本地誌―宮城県・山形県・福島県― 二宮書店

一九七二年 静岡県の地域診断(共同研究) 佐々木清治先生記念論文集 二宮書店

一九七四年 産業の地方分散における情報機能のあり方(共同研究) 社会工学研究所

主要論文

刊行年 題 目

一九五九年 電話通信発生からみた日本の地域区分

一九六〇年 電話通信発生からみた北海道の地域区分

一九六〇年 東京周辺における地域構造(共同研究)

一九六一年 地域診断法について

発表誌・発行所・巻数・号数

地理学評論三二―三月

立正地理学会研究報告2号

地理学評論三三―一〇月

都市計画協会新都市一五―五・六・
七・八・九月

稲永幸男先生をお送りする

- | | | |
|-------|------------------------|------------------|
| 一九六二年 | 予測と地域構造 | OR実務協会予測と計画一―三月 |
| 一九六三年 | 地域診断法について | 立正大学人文科学研究所講演会紀要 |
| 一九六三年 | 北海道における通話圏の地域構造 | 地理学評論三六―八月 |
| 一九六五年 | 通信の都市集積（昭和40年度文部省科学研究） | 日本都市の総合的研究報告 |
| 一九六六年 | 東京における市内通話圏について | 立正地理学会地域研究七号 |
| 一九六七年 | 通信部における通話度数の予測について | 日本電信電話公社経営月報二〇五号 |
| 一九六七年 | 三大都市圏の地域構造 | 関東電気通信局計画部 |
| 一九六七年 | 開発による地域の発達段階 地域開発季報第一報 | 関東電気通信局計画部 |
| 一九六七年 | 開発による地域の発達段階 地域開発季報第二報 | 関東電気通信局計画部 |
| 一九六七年 | 地域と通信 | 関東電気通信局計画部 |
| 一九六八年 | 開発による地域の発達段階 地域開発季報第三報 | 関東電気通信局計画部 |
| 一九六八年 | 開発による地域の発達段階 地域開発季報第四報 | 関東電気通信局計画部 |
| 一九六八年 | 小笠原群島 通信設備計画のための基礎研究 | 関東電気通信局計画部 |
| 一九六八年 | 地域の類型化について | 関東電気通信局計画部 |
| 一九六八年 | 地域相互間の情報交流からみた距離について | 地理学評論四一―八月号 |
| 一九六八年 | 開発による地域の発達段階 地域開発季報第五報 | 関東電気通信局計画部 |
| 一九六九年 | 開発による地域の発達段階 地域開発季報第六報 | 関東電気通信局計画部 |
| 一九六九年 | 情報地域学からみた都市問題 | 東京都首都整備局 |
| 一九六九年 | 情報地域学からみた通郵圏について | 立正大学人文科学研究所年報第八号 |
| 一九七〇年 | 都市化学測定の一試論 | 立正大学文学部論叢第三八号 |

- 一九七一年 交通と都市化の關係に関する研究調査（木内信蔵共同研究）
- 一九七一年 都市の發達と電話
- 一九七二年 わが国における通郵圏の分析
- 一九七三年 山形県における小売業の地域事象論的考察
- 一九七六年 地理学研究法についての私見
- 一九七九年 地理学研究法についての私見Ⅱ
- 一九八〇年 地域情報についての研究
- 一九八二年 わが国における緑化産業の地域形成（共同研究）
- 一九八二年 地理学研究法についての私見Ⅲ
- 一九八五年 地域と事象との關係性について
- 一九八八年 情報処理学についての研究（印刷中）
- 一九八八年 飛驒における農業からみた地域区分（印刷中）

- 運輸經濟研究センター
- 運輸經濟研究センター季刊八号
- 立正大学人文科学研究所年報第一〇号
- 立正大学文学部論叢第四八号
- 立正大学文学部論叢第五五号
- 立正大学文学部論叢第六三号
- 立正大学人文科学研究所年報第一七号
- 立正大学共同研究委員会
- 立正大学文学部論叢第七四号
- 立正大学地理学教室創立六〇周年記念
会
- 立正大学人文科学研究所年報第二三三号
- 上野福男先生喜寿記念会